

モイモイのモイ

(一歩一歩のたった一歩)



選手登録制度 (1)

(話は再び2012年1月の
第1回アンコール・カップ終了
時点に戻る)

最初のアンコール・カップは、
競技選手の登録制度もないまま
実施された。近い将来IFSC
(国際スポーツクライミング連
盟)へ加盟して、クライマーを国
際的な競技会へ派遣することを
考えると、多少はラフでも作っ

ておくべきだった。でも、運営実
務で手一杯になり、そこまで頭
が回らなかつた。コンペを終
わってみると、積み上がった不
手際の中にキーとなるような大
事なことが幾つか見えてきた。
選手登録制度を作ったコンペを
広く公開しないと、そもそも選
手権が成り立たないのだ。プノ
ンペンでも、欧米人がカンボジ
アの少年たちにクライミングを
教えているといった話は聞いて

目指せ、 アンコールクライマー誕生!!



トップロープで悪いホールドをつなぐ練習をするニッチ(仮名)。



雨季のミニ・コンペは内輪のコンペだ。景品を自慢げに掲げる YOUTH の面々。ニッチ(仮名)は中央にいる。

いた。スムロン、キムスロイと僕
は、インストラクターとしてのの
力を付けてきたメサもミーティ
ングに加え、コンペに必要な基
礎的な仕事をひとつひとつ片付
けていくこととした。

概ね19歳未満12歳以上の AC
NYOUTH は、この時点で15人
いた。前に紹介したが、ほとんど
の男子からは、保護者の免責同
意をドタバタ・コントの末によ
うやく得ていた。しかし、2人の
資質の高い女子からそれが取れ
ていなかった。彼女らはコンペ
で決勝に残り、ひとりはスーパー
ファイナルで優勝に迫った。日
本や欧米なら、例え草コンペで
も2人とも出場出来なかつたら
う。僕らの場合、スタートから免
責への理解に阻まれ、様々な逃
げ道を用意していたため、どこ
かで緩み過ぎた。彼女らのひと
り、ニッチはスーパーファイナ
ルで1ポイントの僅差で優勝
を逃した。

だった。4月の末、少し前に亡く
なった彼女の祖母ちゃんのため
の百か日供養があつて、ニッチ
は覚束ない英語で僕を招待し
た。その日、僕は200人くらい
に膨らんだ弔問客に交じってそ
こへ出掛けた。どうやら外国人
は僕一人のようだった。しばら
くすると、ニッチが僕を見つけ、
冷えたコーラを持ってきてク
メール語で何か囁いた。すぐに
は意味不明だったが10分もせず
に納得。小柄な中年の男性が僕
の席に来たからだ。大きな目が
ニッチとそっくりだった。僕ら
はお互い合掌して敬意を示し
た。数日経って、ニッチのお父さ
んが、人工壁のクライミングだ
けなら、という制限付きで免責
同意書にサインをした。お父さ
んは外の岩場へは連れて行って
ほしくないと強調した。そして
こう付け加えた。貴方も娘さん
がいるのなら、お判りでしょう、
娘に、交通事故や人身売買のリ
スクが上がる機会を増やすのが
親の役目ではない、と。僕には言
うべきことが何も浮かんでこな
かつた。

(続く)